別表第4

別表第5

鉄骨造の建物の耐力度調査票

(表面)

Ⅳ 学校種別	Ⅴ 整理番号

	都道府県名	設置者名	学校名	学校調査番号	調査期間		平成 年 月 日～平成 年 月 日		Ⅲ結果点数	
Ⅰ 調査学校					調査者	職名	建築士登録番号	氏名 ㊞	Ⓐ 構造耐力 点	耐力度 Ⓐ×Ⓑ×Ⓒ 点
									Ⓑ 保存度 点	
									Ⓒ 外力条件	

	建物区分	棟番号	構造	階数	面積		建物の経過年数		被災歴		補修歴	
Ⅱ 調査建物					一階面積	延べ面積	建築年	経過年数	状況	被災年	内容	補修年
				＋	m²	m²	明治 大正 昭和 平成 年	年		明治 大正 昭和 平成 年		明治 大正 昭和 平成 年

Ⓐ 構造耐力

① 架構耐力性能 α	階	方向	部材		鉛直荷重時 許容応力f	鉛直荷重時 作用応力σ	風荷重時 許容応力f	風荷重時 作用応力σ	地震時 許容応力f	地震時 作用応力σ	応力比 α＝f／σ 鉛直荷重時	応力比 風荷重時	応力比 地震時	αの算定	
		けた行方向x	はり	中央										ⓔ ⓐ×ⓑ	ⓖ ⓔ又はⓕの最小値
				端部											
				平均											
			柱												
			筋かい												
			二重枠内の応力比の値の最小値 ＊1									ⓐ	ⓑ	ⓕ ⓒ×ⓓ	
		張り間方向x	はり	中央											
				端部											
				平均											
			柱												
			筋かい												
			二重枠内の応力比の値の最小値 ＊1									ⓒ	ⓓ		

判別式		評点		評点合計
α≧1.0	1.0	㋐	㋑(㋐×60) 点	(㋑+㋓+㋕) Ⓐ 点
1.0＞α＞0.3	直線補間			
α≦0.3	0.3			

耐力

② 架構剛性性能 θ	階	層間変位δ けた行方向 X	層間変位δ 張り間方向 Y	階高 h けた行方向 X	階高 h 張り間方向 Y	θ＝δ／h けた行方向 X	θ＝δ／h 張り間方向 Y	θの最大値

判別式		評点		
θ≦1／120	1.0	㋒	㋓(㋒×20) 点	
1／120＜θ＜1／60	直線補間			
θ≧1／60	0.5			

③ 基礎構造 β	種別指数 u	形状寸法	鉛直荷重 P	支持力 Ra	耐力指数 β	判別式 ＊2		評点		
	木くい ；0.8				β＝Ra・u／P	β≧1.5(1.0)	1.0	㋔	㋕(㋔×20) 点	
	RCくい、1本打 ；0.9					1.5(1.0)＞β＞1.0(0.5)	直線補間			
	その他 ；1.0					β≦1.0(0.5)	0.5			

＊1　上限値1.0　＊2　両方向基礎梁付の場合は(　)内とする。

Ⓑ 保存度

	経過年数t	判　別　式		評　点		評点合計
① 経過年数 (残存率T)	年	普通型鋼　$T=\frac{34-t}{34}$	軽量型鋼　$T=\frac{27-t}{27}$	㋐	㋑(㋐×30) 点	㋥＝(㋑＋㋓＋㋕＋㋗＋㋙＋㋛)

② 鉄骨腐食度 F ＊3	部材区分		鉄骨のさびの状況				評価 ＊4	評点	
			無	仕上さび	部分さび	欠損さび			
	軸　組	f_1	1.0	0.8	0.6	0.3	$F=\frac{f_1+(f_2)+f_3}{2(3)}$	㋒ (0.5以下は0.5とする)	㋓(㋒×20) 点
	露出柱脚	f_2	1.0	0.8	0.6	0.3	$=\frac{+(\quad)+}{2(3)}$		
	間柱等	f_3	1.0	0.9	0.7	0.4			

③ 座屈状況 N	部材区分	全体座屈				局部座屈				評価	評点	
		区分	無	軽微	明確	区分	無	軽微	明確			
	軸　組	n_1	1.0	0.8	0.6	n_3	1.0	0.8	0.6	$N=\left(\frac{n_1+n_2}{2}\right)\times\left(\frac{n_3+n_4}{2}\right)$	㋔ (0.5以下は0.5とする)	㋕(㋔×15) 点
	間柱等	n_2	1.0	0.9	0.7	n_4	1.0	0.9	0.7	$\left(\frac{+}{2}\right)\times\left(\frac{+}{2}\right)$		

④ 柱の傾斜量 R	階数	けた行方向柱傾斜量S	張り間方向柱傾斜量S	R＝S／200	判別式		評点	
				R＝(左の最大値)／200 ＝(　　)／200＝1／(　　)	R≦1／500	1.0	㋖	㋗(㋖×5) 点
					1／500＜R＜1／120	直線補間		
					R≧1／120	0.5		

⑤ 不同沈下量 ψ	階	相対沈下量ε けた行方向 X	相対沈下量ε 張り間方向 Y	スパンL けた行方向 X	スパンL 張り間方向 Y	ψ＝ε／L けた行方向 X	ψ＝ε／L 張り間方向 Y	ψの最大値	判別式		評点	
									ψ≦1／500	1.0	㋘	㋙(㋘×5) 点
									1／500＜ψ＜1／120	直線補間		
									ψ≧1／120	0.5		

⑥ 接合方式 M ＊5	部材区分		リベット又は高力ボルト 良	変形	破損	溶接 良	変形	亀裂	普通ボルトまたはアンカーボルト 良	変形	亀裂	評価 ＊6	評点	
	軸　組	m_1	1.0	0.7	0.4	1.0	0.7	0.4	0.6	0.3	0.2	$M=\frac{m_1+(m_2)+m_3}{2(3)}$	㋚ (0.5以下は0.5とする)	㋛(㋚×25) 点
	露出柱脚	m_2							0.6	0.3	0.2	$=\frac{+(\quad)+}{2(3)}$		
	間柱等	m_3	1.0	0.8	0.5	1.0	0.8	0.5	0.6	0.4	0.2			

⑦ 火災による疲弊度 S	程度	構造体変質	非構造材全焼	非構造材半焼	煙害程度	当該階の床面積so	被災率S	判別式		評点
	被災床面積	s1	s2	s3	s4		$S=st/su$	S＝0	1.0	㋜
	評価後被災面積　st	st＝s1＋s2×0.75＋s3×0.5＋s4×0.25						0＜S＜1	直線補間	
								S＝1	0.5	

Ⓑ＝㋥×㋜

Ⓑ　　点

＊3　アンカーボルトおよびベースプレートが対象。　＊4　非露出柱脚の場合は、f_1とf_3の平均とする。

＊5　アンカーボルトのみが対象。　＊6　非露出柱脚の場合は、m_1とm_3の平均とする。

Ⓒ 外力条件

①地震地域係数		②地盤種別		③積雪寒冷地域		④海岸からの距離		評価	評点
四種地域	1.0	一種地盤	1.0	その他地域	1.0	海岸から8kmを超える	1.0	$Ⓒ=\frac{(①)+(②)+(③)+(④)}{4}$ $=\frac{+\ +\ +}{4}$	Ⓒ
三種地域	0.9	二種地盤	0.9	二級積雪寒冷地域	0.9	海岸から8km以内	0.9		
二種地域	0.85								
一種地域	0.8	三種地盤	0.8	一級積雪寒冷地域	0.8	海岸から5km以内	0.8		

(裏面)

学校名	

	調　査　者　の　意　見
1　調査建物の各階の平面図、断面図を単線で図示し、筋かいの位置は、他の壁と区別できるような太線とする。 2　寸法線と寸法(単位メートル)を記入する。 3　著しいさび、座屈については、平面図、断面図に図示する。 4　余白に縮尺、建築年、延べ面積を記入する。	